凛菜・上の家「おかえりなさい」代表

奥野 幸子さん

ふるさとのおもてなしで心待ちにしている人を迎え入れたい

四季の里「凛菜・上の家」は、広々とした座敷でゆったりとした手作りのお膳料理を楽しめる、安らぎの場所です。東日本震災により母屋が被害を受け、現在は休業となっていますが、今年の春の再開を目指して準備を進めています。

写真右／多くの人が凛菜・上の家で、ふるさとの味と温もりを感じてきました。

交流できず悔しい一年

凛菜・上の家は、岩出山地域の豪農であった旧千葉家の住宅です。現在の建物は、茅葺屋根・土壁づくりで明治二十一年に建てられました。

ここで味わってもらう料理はやさしい薄味に仕上げているので、都会の人にもちょうどいいようです。以前、お客さんから「東京に出店してはどうか」というお誘いを受けたことがありました。お気持ちはありがたいのですが、この地で採れた旬なものを、この場所で味わってもらうことに意味があるのだと思っています。

昨年もいろいろな人との交流を楽しみにしていただけに、母屋の被害により営業できなかったことが残念でなりません。

ボランティアの愛

母屋の修復以外で自分ができることから始めようと、庭の植木の手入などをして少しでも早く再開できるように準備をしていました。そんなとき、普段から親交が深い岩出山地域の阿部敬也さんをはじめ「'28うし・とら会ボランティア」の皆さんが、自分たちも震災の影響を受け大変なはずなのに、裏庭の竹を切る作業などに力を貸してくれました。本当に助かったし、感謝の気持ちでいっぱいです。

今までと変わらない気持ちを込めたおもてなしを

屋根の修復は終わったので、今後は柱や内壁を直し、今年の春に営業を再開する予定です。

震災後、予約の電話をたくさんいただきましたが、心苦しくも断らなくてはならない状態が続いています。その際「応援しているよ」「元気をだして」などと励ましの声をいただき、あらためて、この場所は皆さんから愛されているんだなと実感しました。

私にとって凛菜・上の家は、たくさんの人と出会い、数々の思い出を作ることができた大切な場所です。一年ほど休業することになってしまいましたが、今年こそは、ふるさとのそぼくな味と気持ちを込めた温かいおもてなしで、心待ちにしている人たちを迎え入れたいです。

写真左／新しい工場で製品を作り始めたアイネックス㈱。

アイネックス㈱　取締役管理部長

東海林 仙之さん

新天地で再起し今まで以上にものづくりに励みたい

石巻市で操業していたヤマセ電気グループのアイネックス㈱は、東日本大震災で事業所が壊滅的な被害を受けました。しかし、事業を再開するため、大崎市松山地域に拠点を移し、本格操業に向けて少しずつ歩みだしています。

絶望の中の一筋の光

沿岸部にある石巻のアイネックスに津波が到達したのは、東日本大震災が発生した約一時間後でした。平屋建ての事業所は、約三メートルの津波に、あっという間にのみ込まれてしまいました。

なんとか屋根に登ったが取り残されてしまった人、帰宅途中に車ごと流されてしまった人…連絡を取りようにもどうすることもできず、とにかく今を生きることにみんな必死でした。

大崎市から通っていた社員からは、津波に襲われながらも自力で石巻の病院へ行って手当を受け、通りがかりの車に行けるところまで乗せてもらい、その後は歩いて自宅まで帰ったという話しも聞いています。

絶望的な状況の中、救いだったのは、アイネックスの社員が一人も亡くならなかったことです。最悪な事態も想定しただけに、胸をなで下ろしました。

新天地で始動

石巻の事業所は、基礎や柱、屋根を残して、すべて流されてしまいました。しかし、震災から早期に立ち上がり事業を再開するため、昨年五月ごろから近隣の市町を何度も歩いて物件を探し、高台にあって地盤もよく、広さも適していた大崎市松山地域に移転することに決めました。

十月からは事業の一部を再開し、本来の三割程度の状態まで戻っています。

社員の中には、石巻に住んでいて家屋に大きな被害があったため、大崎市に移り住んだり、今でも乗り合いで出勤する人もいて、現在は約三十人ほどが新しい場所で働いています。

今後は、地元大崎市の人材も雇用したいと考えています。

再起を誓う

今はまだ動き始めたばかりですが、アイネックスが作るケータイ電話や自動車関連の部品などプラスチック成型から塗装、印刷に加え、新製品の開発も視野に入れています。元に戻すという考えではなく、新しく生まれ変わるつもりで、本格操業を目指します。